

ネットヨタ京華 「旅立ちの日」 篇

SE バタン（ドアを閉める音）

M ~

女 私が東京でひとり暮らしを始める日、
車で送ってくれたのは父だった。
駅までの道のりは、ずっと無言。
きっとそうなることがわかっていたから、
私は助手席でなく、後部座席に乗った。
車に揺られること数十分。
ようやく駅が見えてきた。
車が、ロータリーに滑り込む。
私は、急ぐように車を降りた。

女 「じゃあ、ありがとうお父さん」

男 「ああ」

女 会話らしい会話は、たったそれだけ。
ドアを閉め、父に向かって軽く手を振る。

女 「それじゃ」

男 「…」

女 父は、何か言おうとして言葉を飲み込んだ。
想いを断ち切るように、私は駅に向かって歩き始める。
振り返ると、車はまだ停まっている。
後ろから次々に車が来るのに、まだ停まっている。
けたたましくクラクションが鳴って、
ようやく、ウインカーが点滅する。
車の中で、父が、目の辺りをぬぐったような気がした。

NA 忘れられないシーンには、いつも車があった。
あなたの人生と共に歩みたい。ネットヨタ京華。